

〈小学校外国語〉

主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

——Small Talk の活用と「話すこと」の場面設定の工夫を通して（第5学年）——

うるま市立田場小学校教諭 伊藤 美奈子

I テーマ設定の理由

現在の子供達が社会に出て活躍する頃には、多文化・多言語の中で、国際的な協調と競争の環境の中にあることが予想され、身近な生活も含め社会のあらゆる場面において外国語を用いて互いの考えを伝え合い理解し合うことが重要となる。そのような新しい時代を生きる子供達に、広い視野を持たせ、異文化の人々と協調して生きていく力や能力を育成することが、昨今の学校には求められている。

今回の学習指導要領の改訂では、小学校中学年から外国語活動、高学年からは外国語科が教科として導入され、小・中・高等学校を通じ一貫した英語教育の充実を図ることが重視された。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』（以下『解説外国語編』）では、「中学年で行う外国語活動や中・高等学校における指導と円滑に接続できるような語彙や表現、練習や活動、題材や場面設定等の配列を工夫したり、系統的な指導が行えるよう、指導方法や学習環境等に配慮したりする」と記されている。学年間や学校間の系統性を考慮し、深い学びに繋げることが重要であると捉えることができる。

これまでの私自身の授業を振り返ってみると、外国語活動として授業をしていた頃は、慣れ親しませることが目標なので、歌やゲーム等の活動が中心で、児童が自分の立場で自分の考えや気持ちを担任や友達と伝え合う活動はなかった。昨年度、小学校高学年で外国語が教科化され、専科教員と協働で授業プランを作成し、児童が自分の考えや気持ちを表現したり伝え合ったりするような活動を設定するように心掛けたことで、意欲的に英語を学ぼうとする児童の様子も見られた。

しかし、児童自身が使う表現においては、その時学習している単元の表現だけに焦点を当てがちで、既習表現を取り入れて習得を図るような展開を意識してこなかった。それまでに習った表現を用いて対話を続けるような指導は徹底して行っておらず、また、対話の続け方の定着も図っていなかった。児童同士のやり取りの場では、1往復すると対話が終了してしまうペアも見られた。英語を使って話すことに必然性を感じていない児童にとっては、「英語を使って話してみたい」という場の設定が不十分であり、「主体的な学び」に繋がられていなかったと考える。

本学級の児童を対象に10月に行った外国語に関するアンケートにおいて、86%の児童が「外国語の授業は楽しい」と回答している。「英語で自分の思いや考えを進んで伝えることができる」「自信をもって英語で会話を続けることができる」に対しては、30%近くの児童が否定的な回答をし、理由に「英語が分からない」「話が続かない」「自信がない」「話すことが苦手」などがあつた。

そこで本研究では、Small Talk の活用を通して、既習表現の習得を図ると共に、対話の続け方や続けるための表現に慣れ親しませ、英語を使って話すことへ自信をつけさせられるよう授業を進めていく。言語活動の「話すこと」を中心に、英語を使って話す「必然性」を持たせるために目的や場面、状況の設定を工夫することで、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする児童が育成されるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

Small Talk の活用と「話すこと」における目的や場面、状況の設定の工夫を通して、既習表現の習得と対話の続け方の定着を図り、英語で話す必然性のある場面を設定し、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする児童の育成について研究する。

Ⅲ 研究仮説

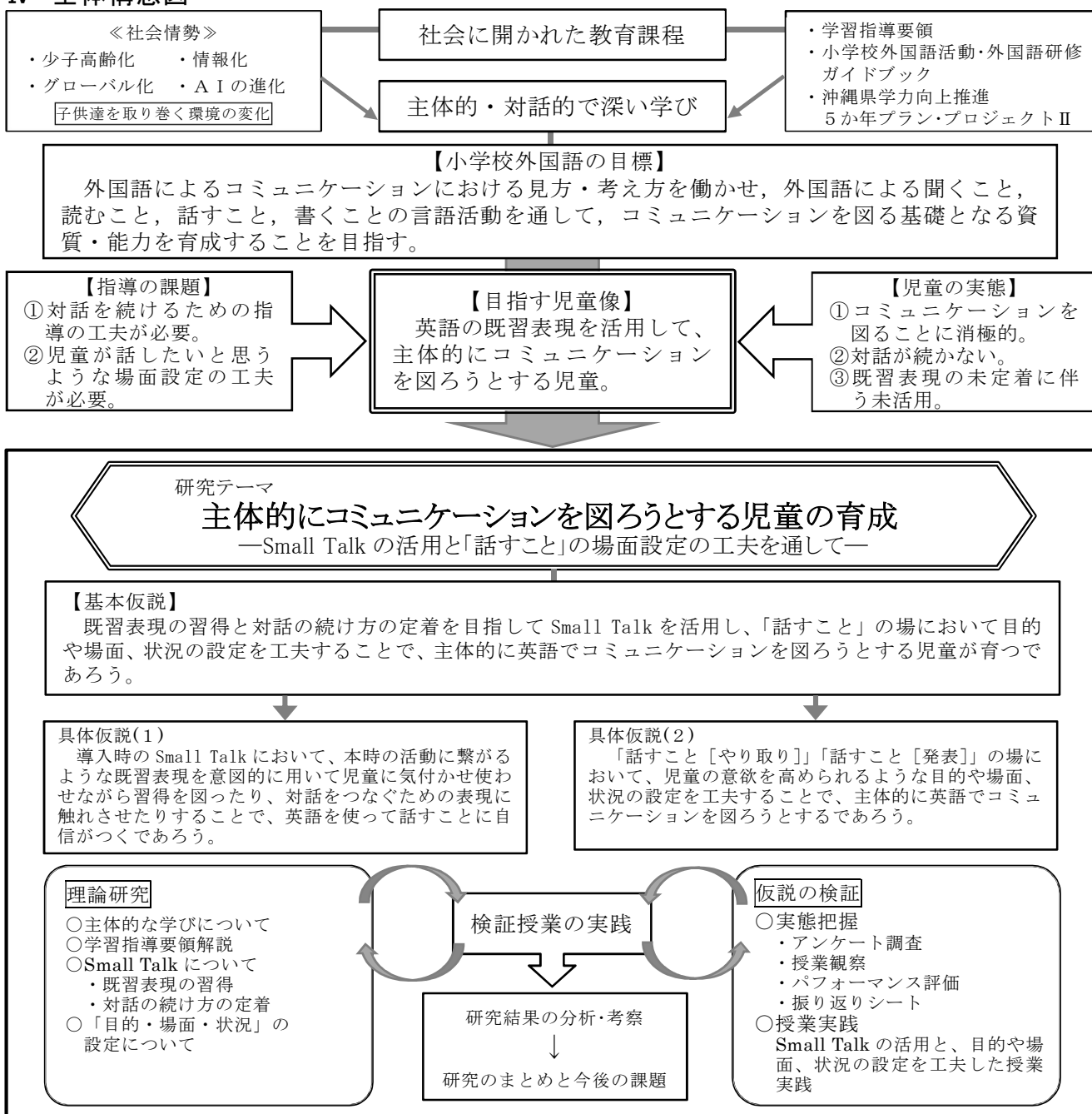
1 基本仮説

既習表現の習得と対話の続け方の定着を目指して Small Talk を活用し、「話すこと」の場において目的や場面、状況の設定を工夫することで、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする児童が育つであろう。

2 具体仮説

- (1) 導入時の Small Talk において、本時の活動に繋がるような既習表現を意図的に用いて児童に気付かせ使わせながら習得を図ったり、対話をつなぐための表現に触れさせたりすることで、英語を使って話すことに自信がつくであろう。
- (2) 「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」の場において、児童の意欲を高められるような目的や場面、状況の設定を工夫することで、主体的にコミュニケーションを図ろうとするであろう。

Ⅳ 全体構想図



V 理論研究

1 主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童について

(1) 「主体的に学習に取り組む態度」について

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 外国語・外国語活動】』に、「主体的に学習に取り組む態度」の観点は、教科の目標の「(3) 学びに向かう力、人間性等」に対応するものであり、「① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力などを身に付けたりすることに向けた粘り強く取組を行おうとしている側面」と「② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面を評価することが記されている。

『解説外国語編』に、「高学年の外国語科の目標を実現するためには、(中略) 児童が興味・関心を示す題材を取り扱い、児童がやってみたいと思うような活動を通して、主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことが大切である。」と示されている。このことから、言語活動を軸として資質・能力を育成することが求められる外国語科において、コミュニケーションを図る活動での児童の主体的な取り組みを重視しなければならないと考える。

田村学は『学習評価』(2021) で、「①粘り強さ」や「②学習の調整」が評価の視点として提言されたことに対し、『知識及び技能』を獲得したり、『思考力、判断力、表現力等』を身に付けたりすることに向けて粘り強く取り組むこと、その取り組みを行う中で、自らの学習をメタ認知しながら調整する態度が期待されている」と述べている。また、「①や②が具体的にどのような態度であり、どのような姿であるかは、そのこと自体を明確に言語化しなければイメージできない」とも述べており、曖昧で分かりにくい評価規準を具体的に言語化することが大切であると捉えられる。田村は、以下のような表記をイメージとして示している。

「○○について(おいて)、△△しながら(して)、□□しようとしている。」

(○○は活動や場面、状況など、△△は態度に関する非認知系の知識など、□□は「主体的に学習に取り組む態度」として表れる行為)

態度に関する非認知系の知識は数値化しにくいいため、「社会情動スキル(誠実性・外向性・協調性・開放性・安定性)」の中から具体的に言語化することで、目指す児童の姿の方向性を示すことを述べている。本研究では「話すこと」が中心なので「外向性」を態度化の中核に位置付け、主体的に学習に取り組む態度として言語化していく。

(2) 「主体的な学び」とは

中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領などの改善及び必要な方策等について』(2016) では、主体的な学びの視点は「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』が実現できているか」と説明されている。『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』(以下『外国語ガイド』)に、「外国語教育における学びとは、外国語を学ぶことや外国語でコミュニケーションをすることである。」と記され、外国語教育における「主体的な学び」として以下の4点が示されている。

- ①外国語を学んだり、外国語を用いてコミュニケーションを行ったりすることに興味や関心をもつこと
- ②生涯にわたって外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関わり、学んだことを生かそうとすることを意識すること
- ③コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定したり理解したりして見通しをもって粘り強く取り組むこと
- ④自らの学習やコミュニケーションを振り返り次の学習につなげること

さらに『外国語ガイド』には、「小学校では、やってみたくらいという気持ちをもって活動に取り組んだり、楽しみながら活動をしたり、自分の本当の気持ちや考えを伝え合いたいという思いをもって活動をしている時、主体的に学んでいると言える。」と記されている。

表1 4つの視点の見取り方

4つの視点		授業内（行動観察） 授業後（振り返りシートへの記述）
①	興味・関心	・楽しみながら活動しているか ・活動を楽しんだか
②	既習表現の活用	・習った表現を使って活動しているか ・習った表現を使えたか
③	粘り強い取り組み	・粘り強く取り組んでいるか ・頑張ったことは何か
④	自己調整学習	・自らの学習を振り返り、次の学習につなげようとしているか

「主体的な学び」とは、単に発表が多いや意欲的に取り組んでいる姿だけではなく、児童自身が自らの学習状況を知り、できなかった課題等に向かって今後どう解決したらよいかという学びに向かう面も見取ることが重要である。『外国語ガイド』に「主体的な学び」として記載されている4点を基に表1のように「主体的な学び」を見取る4つの視点を作成し、それらを授業観察したり、振り返りシートに記述させたりしながら、児童の変容を見取れると考える。本研究では、表1の②～④を中心に田村（2021）の言語化を参考に、「話すこと（友達とのやり取りや発表）の場において、学んだことを活用して自分の思いや考えを伝え合い、自らの学習を調整しながら粘り強く活動に取り組もうとしている児童」を主体的にコミュニケーションを図ろうとしている児童として捉えていく。

2 Small Talk の活用について

(1) Small Talk とは

『外国語ガイド』では、Small Talk を高学年で行う活動と記している。2時間に1回程度、帯活動で、児童が興味・関心のある身近な話題について、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする活動である。Small Talk を行う主な目的を、『外国語ガイド』を基に、以下に二つを示す。

① 既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図る

『外国語ガイド』には、「新学習指導要領に基づく外国語科の指導においては、言語材料の定着にも重点が置かれている。したがって、児童が、現在学習している単元及び当該単元より前の単元で学習した言語材料を繰り返し使用できる機会を保障し、当該言語材料の一層の定着を目指す」と示されている。Small Talk で既習表現に繰り返し触れさせて確実な定着を目指していると捉えることができる。直山木綿子（2019）は、「外国語における『定着』とは、コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて、学習したことをいつでも引っ張り出して使える」ことだと述べている。確実な定着を図るためには、何度も繰り返し英語表現を使わせ慣れさせながら身に付けさせることが大事であると考えられる。

本研究では、『解説外国語編』にもあるように、表現することを繰り返すことで、児童に自信が付き、主体的に英語を使ってコミュニケーションを図ることに有効であると考え、Small Talk を毎時間の導入で取り入れて定着を図る。外国語系統一覧表を参考にしながら、教師が教科の系統性も踏まえ、これまでの児童の既習表現や学習している単元との繋がりのある表現を意図的に取り入れていくことが、Small Talk を活用する上で最も重要であると考えられる。

② 対話を続けるための基本的な表現の定着を図る

母語である日本語で対話をする際にも「反応」したり、相手が言っていることを「繰り返し」たりしながら対話を継続している。それらの英語での表現を、Small Talk で指導し、定

着を図ることが『外国語ガイド』には記されている。また、瀧沢広人 (2019) は「対話を継続させていくためには、『反応する』『質問する』『繰り返す』『感想を言う』『自分のことを言う』から質問する』『答えたら1文足す』のような方法に加え、意図的に話題を『深め』『広げて』いく」必要があると述べている。そこで、初めの段階では、児童が普段の生活で無意識に行っている母国語での対話を想起させながら、外国語における対話でも「反応する」や「質問する」で対話が継続することを確認し、指導を行う。

表2 対話を継続させる方法と基本的な表現例

①あいさつ	Hi. How are you? Good morning.
②反応する	Me, too! Really?
③質問する	What ○○ do you like? How about you?
④繰り返す	A: I like sushi. B: (You like) sushi.
⑤一言感想	That's nice. Good!
⑥表情・ジェスチャー (非言語的要素)	

本研究では、瀧沢 (2019) の対話を継続させる方法と、『解説外国語編』や『外国語ガイド』に記載されている表情やジェスチャーなどの非言語的要素もコミュニケーションを図る上で重要であることも確認し、表2のような表現例を練習しながら慣れさせ、定着を図る。

(2) Small Talk の流れ

山口美穂 (2019) は、「児童が『英語で会話することが楽しい!』と感じるのは、『できた! 伝わった!』と実感する」ときだと述べている。さらに、Small Talk の話題設定については「児童が『やってみたい。』と興味・関心を高められる話題、『頑張ればできそうだ。』と適度な抵抗がある話題など、児童の実態を考慮して話題を設定する」ことが大切だと述べている。

本研究では、Small Talk の目的である既習表現の定着を図れるように児童の既習表現や学習している単元で使う表現等を取り入れながら、児童が話したくなるような話題を設定し、Small Talk を行う。丸岡慎弥 (2019) が、「対話のスキル1つひとつやその効果を具体的に子ども達に伝え、理解させながら実践していくことで、子供たちは対話力を身につけていくことができる」と述べている。ただ対話をさせるだけでは児童に対話のスキルは身につかないので、児童が表現に慣れるまでは図1の対話ポイントを確認し、理解させながら表現の練習に取り組む。活動の前後に黒板に掲示して、意識して使いながら対話の継続を図る。



図1 対話を継続させる方法(黒板掲示用)

様々な対話ポイントを使いながら対話の継続が可能になることを実感することで、外国語を使って話すことへの自信が高まっていくと考える。表3に示した瀧沢 (2019) の Small Talk の流れに基づき、図2の流れで Small Talk の活動を行う。

表3 Small Talk の流れ (瀧沢 2019)

- 1 Teacher's Talk
- 2 児童同士の Small Talk 1
- 3 中間評価
- 4 児童同士の Small Talk 2
- (5 振り返り)

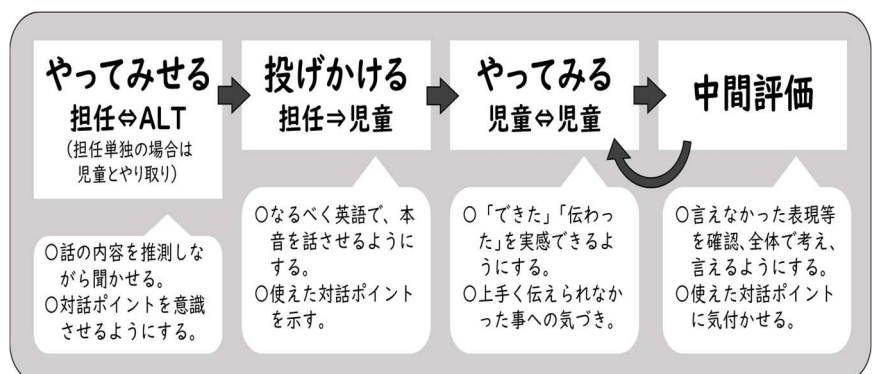


図2 Small Talk 活動の流れ

3 「話すこと」の場面設定の工夫について

小学校外国語科の目標には、4観点5領域での言語活動を通してコミュニケーションの資質・能力を育成することを目指している。『解説外国語編』には、「言語活動を行う際は、単に繰り返し活動を行うのではなく、児童が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。」と記されている。山田誠志（2018）は、「目的・場面・状況があると児童に自分の考えや気持ちをもたせやすく、思考や判断をさせやすくなります。また、そのようなことを話そうとする意欲や必然性をもたせやすくなります。」と述べている。

目的・場面・状況について、酒井英樹（2019）は、「コミュニケーションを行う目的とは、何のために聞いたり読んだり話したり書いたりするのかという情報」、「コミュニケーションを行う場面とは、簡単に言えば、場所や時に関するもの」、「コミュニケーションを行う状況とは、コミュニケーションが行われる物理的環境や心理的な条件のこと」、「目的や場面、状況などを設定する際には、児童が親しみをもち、意欲をもって取り組むことができる」と述べている。

樋口忠彦（2021）は、「児童が（外国語で）聞いてみたくなったり、話してみたくなくなったり、友達と伝え合ってみたくなくなったりするような題材」を設定しながら単元指導計画をするように述べている。児童にとって話したいと思うような場面設定であったり、誰かになりきってではなく自分の本当の気持ちや考えを話させるような目的・場面・状況を設定したりすることが、「話すこと」の言語活動を主体的・意欲的に取りこませるために重要であると捉えることができる。

そこで、本研究では、単元ゴールに向かって行う「話すこと」における言語活動において、児童が興味・関心を持ち、且つ「誰に」という「相手意識」や、「何のために」という「目的意識」をもたせ、英語で話したり伝え合ったりする必然性のある場面設定の工夫を行う。併せて、Small Talkも英語でやり取りをする場であるので、同様に、児童が興味・関心を持つような話題設定の工夫を行っていく。

VI 指導の実際

1 検証授業Ⅰ（実施日 11月24日）

- (1) 単元名 「Where do you want to go?」
- (2) 単元の目標

①行ってみたい場所やその理由の伝え方・たずね方を知って、言うことができる。(知識及び技能)
②行ってみたい場所を伝える表現をなぞり書きすることができる。(知識及び技能)
③行ってみたい場所を考えて伝えたり、たずねたりすることができる。(思考力, 判断力, 表現力等)
④相手にわかりやすく話そうとしたり, 相手の話をよく聞こうとしたりする。(学びに向かう力, 人間性等)

(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話すこと「やり取り」	<p>〈知識〉行ってみたい都道府県の尋ね方や答え方、その理由を伝える表現(Where do you want to go?, I want to go to 【都道府県】., I want to/can [see/eat/buy] 【もの】.)について理解している。</p> <p>〈技能〉行ってみたい都道府県について、尋ね方や答え方、その理由を伝える表現(Where do you want to go?, I want to go to 【都道府県】., I want to/can [see/eat/buy] 【もの】.)を用いて、考えや気持ちなどを伝え合う技能を身に付けている。</p>	<p>外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。</p>	<p>外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。</p>

(4) 単元の指導と評価の計画 (全7時間)

◎記録に残す評価 ○指導に生かす評価

時	◆目標 (ねらい) ○主な活動等	評 価			
		知・技	思判表	態 度	評価規準・方法等
1	◆行ってみたい都道府県とその理由について、まとまった話を聞いて具体的な情報を聞き取る。 ○Let's Watch		聞く ○		〈行動観察・振り返りシート〉 1～4時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても、教師が児童の学習状況を確認する。(○指導に生かす評価)
2	◆行ってみたい都道府県とその理由の尋ね方・答え方がわかり、伝え合うことができる。 ○Activity 1	話す[や] ○			〈行動観察・振り返りシート〉
3	◆行ってみたい都道府県とその理由の尋ね方・答え方がわかり、気持ちを伝える表現を知る。 ○Let's Listen 2	話す[や] ○			〈行動観察・振り返りシート〉
4	◆都道府県クイズを通して、行ってみたい場所とそこでできることの言い方に慣れる。 ○Activity 2 		話す[や] ○	話す[や] ○	〈行動観察・振り返りシート〉
5	◆行ってみたい都道府県を伝える表現をなぞり書きすることができる。Final Activityに向けた準備をする。 ○Let's Read and Write ○Final Activity 	書く ○	話す[や] ◎		◎行ってみたい都道府県について、尋ね方や答え方、その理由を伝える表現 (Where do you want to go?, I want to go to 【都道府県】 .、 I/You want to/can [see/eat/ buy] 【もの】 .)を用いて、考えや気持ちなどを伝え合う技能を身に付けている。 ◎外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。
6	◆行ってみたい都道府県について、相手に配慮した話し方や聞き方の工夫をしながら発表の練習をする。 ○Final Activity 		話す[や] ◎	話す[や] ◎	◎外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。 〈行動観察・振り返りシート〉
7 本 時	◆行ってみたい都道府県について、相手に配慮して話し方や聞き方の工夫をしながら伝え合う。 ○Final Activity 	話す[や] ◎		話す[や] ◎	

(5) 本時の学習 【7 / 7 時間】


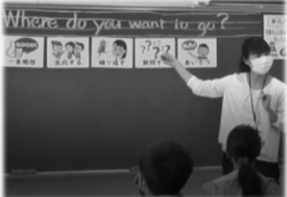





① ねらい

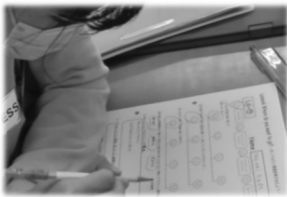
外国の人に日本の良さを知ってもらうために、自分が行ってみたい都道府県でしたい事やできる事を相手に配慮して話し方や聞き方の工夫をしながら伝え合う。

② 本時の評価規準

評価の観点	話すこと[やり取り]【主体的に学習に取り組む態度】
評価規準	外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。
評価方法	授業内：行動観察、発言 授業後：振り返りシート、動画

③ 展開例

	学習活動・内容・発問	予想される児童の反応	指導上の留意点・評価等
導入 10分	<p>1. Greetings</p> <p>2. Small Talk テーマ：好きなアイスクリーム 担任とALT →児童同士 →中間評価 →児童同士</p> <p>3. Today's Goal 行ってみたい都道府県で、したい事やできる事を伝え合おう。</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・担任とALTの話聞いて、内容を理解しようとする。 ・友達とやり取りをする。 ・言えなかった表現や困り感を共有する。 ・めあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「繰り返す」「反応する」「質問する」「一言感想」を意識する。  <ul style="list-style-type: none"> ・単元ゴール(目的)も意識させる。
展開 30分	<p>4. デモンストレーション 担任とALT</p> <p>5. Activity 児童同士で伝え合う。(1回目)</p> <p>6. 中間評価 困り感を共有して解決する。</p>  <p>7. デモンストレーション 児童同士(良い点を共有する)</p> <p>8. Final Activity 児童同士で伝え合う。(2回目)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任とALTのやり取りを見て、活動内容を理解しようとする。 ・ペアでやり取りをしようとする。 ・伝えたいけど伝えられない表現等に気付く。 ・困ったことをみんなで解決しようとする。 ・良いやり取りのポイントを考えようとする。 ・良いやり取りを意識して、伝え合おうとする。  	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末(ジャムボード)を使用させる。 ・どう表現したら伝わるか、児童に考えさせるようにする。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>It's good! (ジェスチャーも)</p> </div>  <p>【態度】 外国の人に日本の良さを知ってもらうために、行ってみたい都道府県やその理由について、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。</p>

終 末 5 分	9.まとめ	・振り返りシートに記入する。 	
	10. Greetings		

2 検証授業Ⅱ（実施日2月2日）

(1) 単元名 「This is my dream friend.」

(2) 単元の目標



- ①人の得意なことや特徴の伝え方を知って、言うことができる。(知識及び技能)
 ②人を紹介する表現を知って、言うことができる。(知識及び技能)
 ③友達になってみたい人を考えて、ワークシートに書き、紹介することができる。(思考力、判断力、表現力等)
 ④相手にわかりやすく話そうとしたり、相手の話をよく聞こうとしたりする。(学びに向かう力、人間性等)


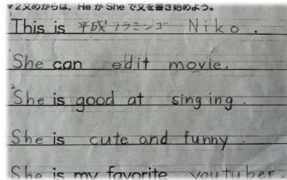


(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話すこと「発表」	<p>〈知識〉人物の特徴を表す語句や表現 (He/She can 【できること】.、I am [He is/She is] good at 【得意なこと】.、He/She is [brave / cool / cute].) について理解している。</p> <p>〈技能〉人物の特徴を表す語句や表現 (He/She can 【できること】.、I am [He is/She is] good at 【得意なこと】.、He/She is [brave / cool / cute].) を用いて話す技能を身に付けている。</p>	友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話している。	友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、これまでの学習の中で気付いたことを活かしながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話そうとしている。

(4) 単元の指導と評価の計画（全7時間）

◎記録に残す評価 ○指導に生かす評価

時	◆目標（ねらい） ○主な活動等	評 価			
		知・技	思判表	態 度	評価規準・方法等
1	<p>◆第三者の紹介のしかたを知り、得意なことを伝える表現にふれる。 ○Let's Watch ○Let's Think</p> 		話す[や] ○		<p>〈行動観察・振り返りシート〉</p> <p>1～4時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても、教師が児童の学習状況を確認する。(○指導に生かす評価)</p>
2	<p>◆登場人物の得意なことを聞いて、自分が得意なことを友達と尋ねたり答えたりする。 ○Let's Listen 1 ○Activity 1</p>	話す[や] ○			〈行動観察・振り返りシート〉
3	<p>◆第三者のできることや得意なことを聞いたり言ったりする。 ○Let's Listen 2 ○Activity 3</p> 	話す[や] ○			〈行動観察・振り返りシート〉

4	<p>◆第三者についてそれぞれの得意なことや特徴について聞いたり言ったりする。 ○Activity 2</p> 		<p>話す[や] ○</p>	<p>話す[や] ○</p>	<p><行動観察・振り返りシート></p>
5	<p>◆自分が友達になってみたい人やキャラクターについて紹介する文を書く。 ○Let's Read and Write ○Final Activity</p> 		<p>書く ○ 話す[発] ○</p>	<p>話す[発] ◎</p>	<p>○友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現の中から適したものを選んで書き写している。 ◎人物の特徴を表す語句や表現(He/She can 【できること】、I am [He is/She is] good at 【得意なこと】、He/She is [brave / cool / cute].)を用いて話す技能を身に付けている。 ◎友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話している。 ◎友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、これまでの学習の中で気付いたことを活かしながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話そうとしている。</p>
6 本 時	<p>◆自分が友達になってみたい人やキャラクターについてのスピーチを考えて練習をする。 ○Final Activity</p> 		<p>話す[発] ◎</p>	<p>話す[発] ◎</p>	<p>◎友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、これまでの学習の中で気付いたことを活かしながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話そうとしている。</p>
7	<p>◆他者に配慮しながら、友達になってみたい人やキャラクターを紹介するスピーチをする。 ○Final Activity</p> 	<p>話す[発] ◎</p>		<p>話す[発] ◎</p>	<p><行動観察・振り返りシート></p>

(5) 本時の学習 【6 / 7時間】

① ねらい






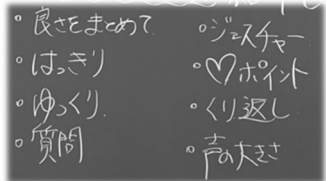

自分が友達になってみたい人やキャラクターについてのスピーチを工夫し、紹介しようとする意欲を高める。

② 本時の評価規準

評価の観点	話すこと[発表]【主体的に学習に取り組む態度】
評価規準	友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、これまでの学習の中で気付いたことを活かしながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話そうとしている。
評価方法	授業内：行動観察，発言 授業後：振り返りシート，動画

③ 展開例

	学習活動・内容・発問	予想される児童の反応	指導上の留意点・評価等
導入	1. Greetings		

10分	<p>2. Small Talk テーマ: 自分の得意なこと 担任とALT →児童同士 →中間評価 →児童同士</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任とALTの話聞いて、内容を理解しようとする。 ・友達とやり取りをする。 ・言えなかった表現や困り感を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「繰り返す」「反応する」「質問する」「一言感想」を意識する。
展開30分	<p>3. Today's Goal 夢の友達の良さが4年生に伝わるように、紹介しよう。</p> <p>4. Activity</p> <ol style="list-style-type: none"> ① どう紹介したら、良さが伝わるかを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ゆっくりはっきり言う ・ 前を見ながら言う ・ 堂々とする ② ペアで練習をする。 ③ 児童の紹介を見て、いいところを共有する。 ④ デモンストレーション  <ol style="list-style-type: none"> ⑤ より良い伝え方を考え共有する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 相手に問いかける ・ ジェスチャーを加える ・ 自己紹介も入れる ・ もっと♡ポイントを入れる ⑥ ペアで練習をする。 ⑦ タブレットで自撮りをし、セルフチェックする。  <ol style="list-style-type: none"> ⑧ 中間評価。 ⑨ 再度、タブレットで自撮りをし、セルフチェックする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4年生への良い伝え方を考える。 ・ 友達の発表の良いところに気付く。  <ul style="list-style-type: none"> ・ 困ったことをみんなで解決しようとする。 ・ より良い伝え方を考えようとする。 ・ ペアでアドバイスし合い、改善していこうとする。 ・ より良い発表を意識して、4年生に向けての発表をペアで見合う。 ・ 自身の発表の様子を見て、できていることやできていないことに気付く。  <ul style="list-style-type: none"> ・ 1回目の発表との変容に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単元ゴールの発表相手である4年生を意識させるようにする。 ・ できるだけ言語面での工夫を意識させるようにする。 ・ どう発表したらより良く伝わるか児童に考えさせ、発言させるようにする。  <ul style="list-style-type: none"> ・ タブレット端末で自分を録画し、自分の変容に気付かせるようにする。 <p>【態度】 友達に「夢の友達」をよく知ってもらうために、その人物やキャラクターの得意なことやできること、特徴について、これまでの学習の中で気付いたことを活かしながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話そうとしている。</p>
終末5分	<p>5. まとめ</p> <p>6. Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りシートに記入する。 	

VII 仮説の検証

基本仮説

既習表現の習得と対話の続け方の定着を目指して Small Talk を活用し、「話すこと」の場において目的・場面・状況の設定を工夫することで、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする児童が育つであろう。

検証授業Ⅰ・Ⅱおよび単元を通じた実践において、アンケート、振り返りシートの記述、パフォーマンス評価及び授業観察をもとに具体仮説について検証を行う。

1 具体仮説(1)の検証

導入時の Small Talk において、本時の活動に繋がるような既習表現を意図的に用いて児童に気付かせ使わせながら既習表現の習得を図ったり、対話をつなぐための表現に触れさせたりすることで、英語を使って話すことに自信がつくであろう。

検証授業Ⅰ、Ⅱにおける具体仮説(1)の検証内容を、具体的に示す。

場	導入時の Small Talk
手立て	<p>①使わせながら既習表現の習得を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が興味・関心を持ち、学習した言語材料を繰り返し使えるような話題の設定 ・中間評価で言いたい表現の確認 <p>②対話をつなぐための表現に触れさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対話の継続法を「対話ポイント」として学ぶ ・「対話ポイント」の使用に意識を向けさせる（黒板掲示）
目指す児童像	英語を使って話すことに自信がつく

(1) 既習表現の定着について

① 検証授業Ⅰ Lesson 6 「Where do you want to go?」

本単元では、都道府県に行きたい理由を伝える表現に重きをおいて Small Talk の話題設定を考えた。既習表現である「I like ～. (好き)」や「I / You can ～. (できる)」に加え、新出表現である「I want to [動詞]～. (したい)」を取り入れるようにし、身近な話題でペアでやり取りができるようにした。

表4に示したように、児童にとって身近な話題、興味・関心をもって話せる話題、前時の授業内容を復習しその日の授業内容に合った話題等を組み合わせて既習表現を組み込んで行った。既習表現を忘れていた児童の姿があったが、初めの担任とALTのやり取りを見ながら推測したり、友達とやり取りする中で教え合ったり、中間評価で「言いたかったけど言えなかった表現」として全体で確認したりしながら習得を図った。

表4 Lesson 6 の Small Talk 指導計画表

時間	テーマ	主な既習表現	指導する対話ポイント
第1時	好きな季節	What ~ do you like? 季節	質問する
第2時	行きたい都道府県	Where do you want to go? I want to go to (都道府県).	繰り返す
第3時	行きたい都道府県	Where do you want to go? I want to go to (都道府県).	反応する
第4時	好きな食べ物	What food do you like? I like ~. It's delicious(形容詞).	一言感想
第5時	日本の好きな所	I like ~. You can ~.	アンケート調査
第6時	行きたい都道府県でやりたい事・できる事	I want to go to (都道府県). I [want to/can] (動詞) ~.	
第7時	好きなアイスクリーム	I like ~. I can buy ~ at (場所・店).	

第1時では、本単元で扱う既習表現である季節を取り入れ、「好きな季節」をテーマにやり取りを行った。次に、第2～4時は、本単元のキーセンテンスとなる表現に十分に言い慣れさせ、対話ポイントの練習と組み合わせて行った。

好きなアイスクリームについてやり取りした際には、既習表現の「What ice-cream do you like?」「I like (flavor).」「Why?」「I/You can buy (ice-cream) (場所).」で伝え合う児童の姿が見られた。好きな季節、好きな食べ物、好きな所など、「好きな○○」をテーマに多く取り入れたことで、4年生で学んだ「What (名詞) do you like?」「I like ~.」とスムーズにやり取りができるようになった。また、「都道府県に行きたい理由に、「I like ramen. I want to eat Sapporo-ramen.」と伝え合う場面も見られた。

② 検証授業Ⅱ Lesson9 「This is my dream friend.」

本単元においても、Lesson6と同様に、表5のように児童にとって身近な話題、興味・関心のある話題、前時の既習表現の復習、授業内容に合った話題等を組み合わせ、計画を立てて活動を行った。

第1時では、既習表現や本単元の新出表現を使用してALTに夢の友達を紹介してもらった。図3のように、表現に合った写真を提示しながら聞かせることで、新出表現も含めて大体の内容を理解することができていた。

第3時では、前時で学んだ「be good at 【得意なこと】」とLesson3で学んだ【教科】の表現を組み合わせ、既習表現を繰り返し使うようにし、中間評価で言いたい表現を確認した。机間指導しながら、「I'm good at play basketball.」と不完全な表現になっていた児童に「You are good at playing basketball.」とplayingの部分を強調して児童に返し、正しい表現に気付くように促した。

第4時では、前時の新出語彙である人柄を表す形容詞(cute、smart、cool等)を活用させるアウトプットの時間を十分に確保できなかったため、再び音をインプットし、アウトプットをさせる目的で活動を行った。様々な人物やキャラクターの写真やイラストを黒板に並べて、自分の思う人柄を時間いっぱいペアに伝えさせた。この活動以降、「やさしい」や「おもしろい」の言い方に対する質問を児童同士で教え合うようになった。Lesson6で学んだ言語材料を用いて、「Anpanman, he is delicious.」と楽しく伝え合う児童達の様子も見られた。また、Lesson5で学んだHeとSheの違いが分からない児童もいたが、人柄を伝え合いながら習得させることができた。

児童は、「can」に続く動詞の原形を使うことはできるが、本単元における新出表現「be good at」に続く現在分詞(動詞+ing)を混同してしまっている様子であった。第6時のSmall Talkでは、ALTと共に【得意なこと】の表現だけに焦点を当て、やり取りのデモンストレーションを行い、児童に使って欲しい表現の焦点化を図った。それでも、習得できていない児童の姿が見られたので、第7時でも取り上げて正しい表現への気付きを促した。

以上のことから、学習している単元と当該単元以前の既習表現を繰り返し活用できる場として、Small Talkのテーマを児童の興味・関心に合わせて設定し計画的に行うことで、既習表現の定着につながったと捉えることができる。Small Talkだけではなく、授業内の活動の姿から児童の苦手とする表現を把握し、焦点化して習得を図ったことも有効な手立てであった。今後も、既習表現の定着が図れるように、継続的・計画的に活動を行っていくことが重要であると考えられる。

(2) 対話の継続について

検証授業Ⅰの単元であるLesson6の第1時のSmall Talkで、1分間テーマに沿って対話を継続できるか実際にさせてみた。一問一答で終わってしまい、残りの時間を困った表情で過ごしているペアが多く見られた。友達とおしゃべりを例に挙げ、英語でも会話が続くようになる「対話ポイント」を黒板に掲示しながら伝え、全体で共有した。児童が既に使っている「あいさつ」と「ジェスチャー」を除いた4つの対話ポイントを、図4のよう

表5 Lesson9のSmall Talk指導計画表

時間	テーマ	主な既習表現
第1時	ALTの夢の友達	He/She can ~.
第2時	できること	I can ~.
第3時	好きな教科 得意なこと	I like (教科). I am good at ~.
第4時	自分が思う人柄	He/She is (形容詞).
第5時	うまい棒で好きな味	I like ~. my favorite
第6時	得意なこと	I am good at ~.
第7時	好きなキャラクターと その人柄	I like ~. He/She is (形容詞).

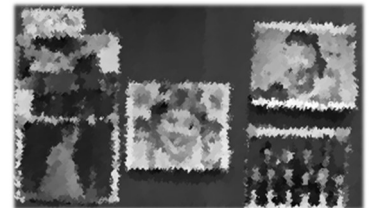


図3 ALTが夢の友達を紹介する際の黒板掲示物



図4 「反応する」を指導した際のポップ(第3時)

に、第1時から第4時まで1つずつ表現例をポップで掲示しながら紹介し、実際に言ってみながら慣れ親しませるようにした。第5時以降は、図5のように、黒板に對話



図5 確認しながら對話ポイントを掲示（第5～7時）

ポイントのみを確認しながら掲示し、使い慣れていくことを目的として意識させながら Small Talk を行った。授業後に授業内で使ってみた對話ポイントを振り返らせることで、実際のやり取りで意識しながら使おうとする児童の姿が見られた。図6の結果から、回数を重ねる毎に對話ポイントを使えたことを実感する児童が増えていることが分かる。検証授業Ⅰで扱った単元は、中心領域が「話すこと[やり取り]」であり、Small Talk だけに限らずやり取りの活動が多かったことや、對話ポイントが掲示されていることで意識して使おうと思ったからである

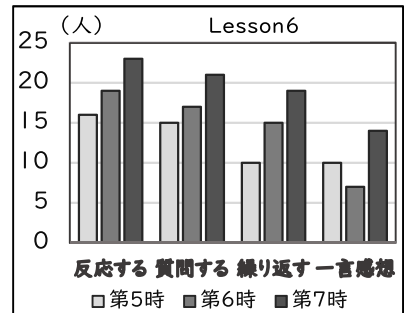


図6 やり取りで使えた對話ポイントの集計

と考える。検証授業後に行ったアンケートの「對話ポイントを知って、以前より英語で会話を続けることに自信がつけましたか?」という問いに、1人を除き27人が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答をしていた(図7)。また、Small Talk に関して「会話がはずむ。」「スモールトークが楽しい。」「相手のことが知れるからやり取りが好き。」などの記述も見られた。

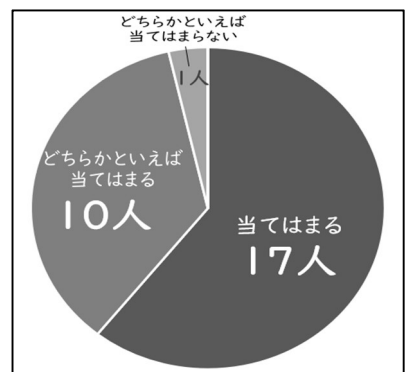


図7 英語で会話をすることに自信がついた児童数

さらに、「実際に外国人とお話ができそうですか?」の問いに対する結果は、図8の通りである。「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答をした児童が、検証前には10人

(34%) だったが、検証授業Ⅰ後には19人(66%)と約2倍に増えた。

外国語科の5領域で「話すこと[やり取り]」が一番苦手だと言っていたA児(図9)は、検証授業前後で「自信をもって英語で会話を続けることができる」に対して「当てはまらない」から「どちら

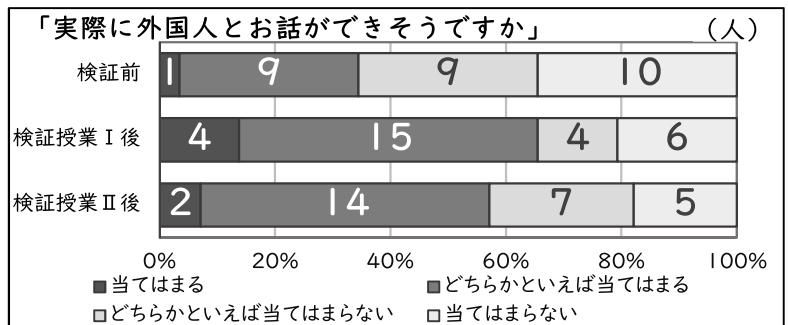


図8 外国語に関するアンケートの結果

かといえば当てはまる」へと変容が見られた。授業後に肯定的な回答になった理由として「反応することができた。一言感想が言えた。」と對話ポイントが使えたことを記述していた。授業内の行動観察からも、相手の発言を繰り返したり、反応したりする姿が見られた。検証前は、全体の場で積極的に質問する様子は見られなかったが、中間評価の時に「どう言えばいいの?」と表現を質問するようになり、大きな変容が見られた。對話ポイントを使ってやり取りが継続するようになり自信がついたことから、英語を使って伝えたいという意欲の高まりも出てきたのだと推測する。図10のように、検証授業Ⅱでは、Small Talk においてジェスチャーも交えながら伝えようとする姿が見られた。



図9 A児のやり取りの様子



図10 A児のSmall Talkの様子

以上のことから、對話を継続させるための方法として「對話ポイント」の6つを指導したことや、使い慣れるまでは掲示して可

視化し意識させるようにしたことで、対話の継続ができるようになり英語を使って話す自信につながったと捉えることができる。対話ポイントの表現例を初めだけはポップを出して練習しながら表現に慣れ親しませたり、使ってみた対話ポイントを振り返らせたりしたことは、対話ポイントを定着させる上で有効な手立てであったと考える。

2 具体仮説(2)の検証

「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」の場において、児童の意欲を高められるような目的や場面、状況の設定を工夫することで、主体的にコミュニケーションを図ることができるであろう。

検証授業Ⅰ、Ⅱにおける具体仮説(2)の検証内容を、具体的に示す。

場	「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」
手立て	児童の意欲を高められるような目的や場面、状況の設定の工夫 ・児童が興味・関心を持って取り組めるような Small Talk の計画と単元ゴールの設定 ・目的意識（何のために）や相手意識（誰に）を持たせる ・英語で話す必然性 ・児童がやり取りや発表をする環境設定
目指す児童像	主体的に英語でコミュニケーションを図る ・振り返りシート ・アンケート ・行動観察や授業内における発言

(1) 「話すこと」の場面設定の工夫

① 検証授業Ⅰ Lesson6 「Where do you want to go?」

本単元における中心領域は「話すこと（やり取り）」である。第1時から第3時までは、本単元における新出表現に十分に慣れ親しませるために、児童本人が「コロナが収束したら家族旅行で行きたい都道府県」を選択し、そこで自分がしたい事を友達と伝え合う活動を行った。Small Talk で活用した「Where do you want to go?」「I want to go to [都道府県].」や、してみたいことなどの表現を用いて、本当に自分が行きたい場所について意欲的に伝え合う児童の姿が見られた。

第3時で単元ゴールに意識を向けさせるため、「英語を使って誰に伝えたいか」を問い、児童らに考えさせてから「外国の人であるALT」を伝える相手と設定し英語で話す必然性を持たせた。児童自ら考えたことから、児童にとってALTが英語を使って話しやすい相手なのだと感じる。次に、児童に日本の文化や自然の魅力に目を向けさせる意図で、沖縄県を例に挙げ「外国人観光客をどこに連れて行きたいか、何を食べさせたいか」を問うと、「美ら海水族館」「きれいな海」「沖縄そば」「ゴーヤチャンプルー」などと答えた。それを踏まえて、各都道府県にも名所や郷土料理など、そこならではの魅力があることを伝え、それらを外国の人にも知ってもらいたいという意欲を持たせて「日本の良さを知ってもらうため」と目的を設定した。

単元ゴールに向かって「相手意識」や「目的意識」を持ったことで、自分の行きたい都道府県の観光名所や特産品、有名な食べ物などを調べる児童の様子が見られ、意欲の高まりを感じた。大阪に行きたいと言っていた児童が、「富士山」が見られる山梨県に変更したり、北海道で「スキー」をしたいと言っていた児童が外国でも雪は降ることから「さっぽろ雪まつ



図 11 Lesson 6 の単元ゴール

り」に変更したりするなど、児童の変容も見られた。また、第6時では、積極的にALTとやり取りを行う児童の姿も見られた。児童にとって、英語を使って話したいと思う相手が身近にいるALTであり、実際に伝えることができる相手であったので、興味・関心を持って取り組むことができたのだろうと考える。

本時では、「ALTに日本の良さを知ってもらおう」を目指して考えてきた都道府県とそこへ行きたい理由を、グループで伝え合う活動を行った。図12と13は、「外国語の授業は好きですか?」「外国語の授業は楽しいですか?」に対して「当てはまらない」と回答し、4技能で「話すこと」が一番苦手と答えた児童2人のやり取りの様子である。やり取りをする環境の工夫として、気の合う友達・話しやすい友達・困った時に助けてくれそうな友達とグループを作らせた。グループ内で普段通りに質問し合ったり、相手の発言に反応したりしながらやり取りをしている様子が見られた。「話すこと[やり取り]」の場において、このように環境設定をすることは、2児童への配慮として適切であり主体的にコミュニケーションを図ろうとするようになったと考えられる。振り返りシートに「自信をもって伝えることができた」「反応してくれたから話せた」の記述が見られ、やり取りの場の設定は手立てとして有効であったと考える。本単元では、相手意識が外国人であるALTだったので、食べ物や建物の写真などを事前にスライドで用意させたが、複数のスライドにまたがっていたため発表に近いやり取りになってしまった。1枚のスライドに数枚の写真を収めた方が、より自然なやり取りになったのではないかと考える。



図12 児童のやり取りの様子①



図13 児童のやり取りの様子②

② 検証授業Ⅱ Lesson9 「This is my dream friend.」

本単元は5年生の教科書の最終単元であり、中心領域は「話すこと(発表)」である。第1時では、自分なら友達になってみたい人やキャラクターを紹介する際に何を伝えるか、これまでに学習してきた英語の表現を使って言えそうなのは何かを考えさせた。名前、誕生日、好きなこと、できること、職業など児童の発言を板書し5年生に進級したばかりの時に比べ、英語を使って話せるようになったことが増えたことを可視化し、成長を実感させた。

図14のように単元ゴールの「目的意識」を「夢の友達をよく知ってもらうため」とし、よく知ってもらうために伝えることを新出表現である「be good at【得意なこと】」、人柄、既習表現から「can【できること】」、職業とした。そして、「相手意識」をこれから5年生になり外国語科を学習する「4年生」と設定した。児童達は、1年前の自分と現在の自分では、使える表現が増えたことを実感していたことから、「下級生である4年生に、1年間学んで使えるようになった英語で夢の友達の発表を見てもらう」ことを伝え、発表する際には英語で話さなければならないという必然性を持たせた。コロナ禍中で、4年生と対面で発表会をもつことは難しいと判断し、発表の様子を録画して見てもらうこととした。

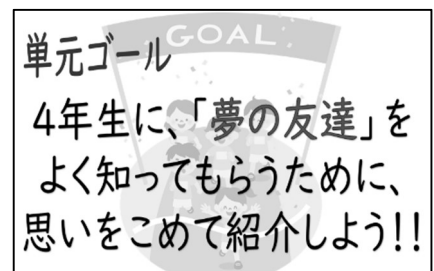


図14 Lesson9の単元ゴール

児童は、自分の好きな有名人やキャラクターなどをよく知ってもらうためにどのように紹介するかに興味・関心を持ち、新出表現となる「得意なこと」や「人柄」を表す表現に慣れ親しみながら、夢の友達について言いたいこと・伝えたいことを考える様子が伺えた。「4年生に英語で話している姿を見せる」という意識から、中間評価における児童からの質問の回数が増えた。本当に言いたい事を伝えようとする意欲が向上し、「誕生日を伝えたい」「好き

なことも言いたい」と言う児童の姿も見られた。本単元においては、「書くこと」の指導に向け、自分の夢の友達について、紹介したいことを考えて「得意なこと」や「人柄」等について、文字をなぞったり、単語カードから選んで貼ったりする時間を授業の活動後に設定し、第5時の紹介文を書く活動へつなげた（図17）。



図15 得意なこと（第2時）



図16 人柄について（第3時）

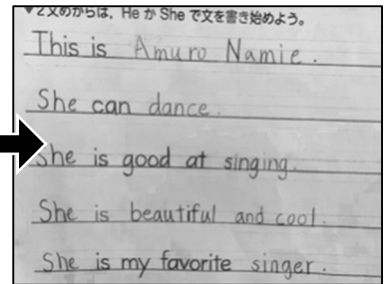


図17 児童の紹介文（第5時）

本時では、紹介の様子の録画に向けて自分が紹介している様子を自撮りし、発表をより良くするために工夫していく活動を行った。自撮りをする前に、まずはペアで発表を見合ったり、モデルとなる児童やALTの発表のデモンストレーションから工夫を見つけたりした。その後、自分ができそうな工夫を取り入れて発表の様子を自撮りさせ、自分を客観的に見る事で、自分ができていないことに気付く児童の様子も見られた。声の大きさや速さなどの工夫は多くの児童に見られたが、言語面での工夫があまり見られなかったため、具体的に示す必要があったと感じる。本時の振り返りシートからは、「前よりハートポイントが使えるようになった。」「詳しく伝えられた。」「自分の動画を見て分かりやすいと思った。」などが見られ、24人（89%）の児童が以前よりレベルアップをした発表になったと感じていた（図18）。

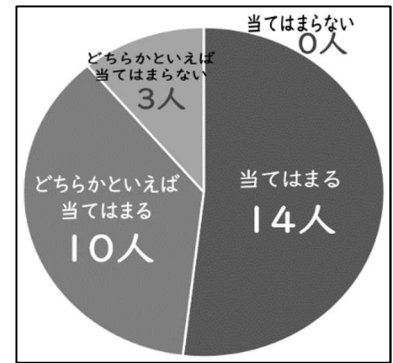


図18 「レベルアップした」と感じた児童数

第7時では、Google Meet で繋いでライブで発表会をすることに変更し、4年生に発表する場を設定した（図19）。単元ゴールの目的意識である「夢の友達をよく知ってもらうため」に伝えることは何かを再認識し、ペアで最終練習を行った。表現に焦点を当てたことで、ペアの発表の良さを伝え合った付箋紙や自分の改善点では「得意なこと」「職業」「人柄（ハートポイント）」「伝える順番」などについての記述が見られた。Google Meet での発表は、児童らは緊張していたが、一生懸命目の前にいる4年生に伝えようとする姿が見られた。「4年生の前で発表ができた。楽しかった。」「恥ずかしかったけど、がんばって最後まで言うことができた。」「とっても楽しかった。夢の友達のハートポイントや職業を言えたのでよかった。またやりたい。」「とってもドキドキして緊張した。でも、4年生に私の夢の友達を伝えられてとても嬉しかった。」と児童は振り返りシートに記述していた。急な変更ではあったが、児童は目の前に発表する相手がいたことで、より意欲的に取り組む姿が見られたので、環境設定の手立てとして有効であったと考える。また、図20は「発表することが楽しかったか」を振り返った結果である。「当てはまる」と回答した児童が23人（85%）だったことから、ほとんどの児童が意欲的に発表したと捉えることができる。



図19 Google Meetでの発表会の様子

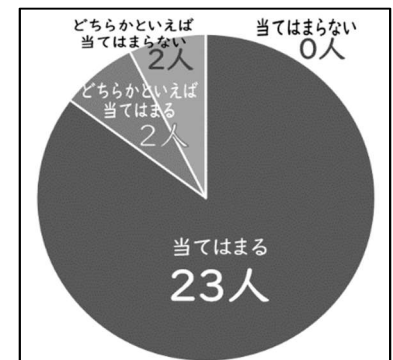


図20 「発表することが楽しかった」と感じた児童数

授業後に、4年生の感想をいくつか紹介し、本単元を通して、英語で話せる表現が更に増えたことを確認し自信へと繋げられるようにした。単元終了後には「4年生の頃よりたくさん話せるようになった。」「英語で話せるようになった。」と自分の成長を改めて実感している記述が見られた。

🌸 4年生からの感想 🌸

- 5年生の夢の友達が、いろいろなキャラクターがいておもしろかったです。聞こえないときもあつたけど、頑張って発表していることが伝わりました。
- バレーの日本代表が好きと言っていました。かっこいいと思いました。
- 私も平成フラミンゴと友達になりたいです。
- 5年生の発表を見て、ほくもこのように英語を言えるようになりたいと思いました。
- 夢の友達の発表を聞くのが楽しかったです。5年生、英語が上手でした。
- 琉花さんの発表が分かりやすかったです。私も5年生になったら、発音をよくして、次の4年生に紹介できるようにしたいです。
- とても上手だったので、私も5年生になったら英語を頑張りたいです。

図 21 4年生からの感想（一部）

(2) 振り返りシートやアンケートの結果による検証

検証授業 I における毎時間の振り返りシートの集計の結果が図 22 である。自分が知っている英語やこれまでに習った表現を効果的に活用して話せたと振り返った児童が増え、単元最終時には全児童が肯定的な回答をした。時数を重ねるごとにインプットとアウトプットを繰り返して表現を使い慣れていく様子や不完全な表現であることに気付いて修正していく様子も見られた。

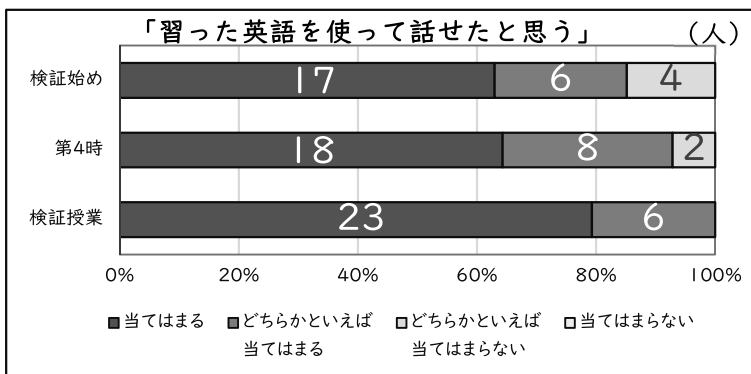


図 22 Lesson 6 における既習表現に関するアンケートの結果

Small Talk や Activity の中でも、対話ポイントも含め、知っている英語を効果的に活用して話し続けていたことから、主体的に児童がコミュニケーションを図ったと考えることができる。

図 23 は、Lesson 9 の目標表現である「得意なこと」「人柄」「できること」の表現を用いて発表ができたかを自分自身で振り返った際の結果である。自己評価においては、25 人 (93%) の児童が「表現を使えたか」に対して肯定的な回答していた。出版社のルーブリックを基に「技能」の評価 (表 6) をしたところ、A・B と評価した児童も 25 人 (93%)、C と評価した児童は 2 人であった。「目標表現を使えたか」に対して「どちらかといえば当てはまらない」と回答した児童の内 1 人は、第 3 時～第 6 時まで欠席したので、評価はしなかった。C と評価した児童 1 人は、自己評価では「表現を使えたか」に対し肯定的な回答をしていた。自己評価と実際の評価のズレを防ぐために、ルーブリックを提示し、児童が正しい表現を意識して使えるように見通しを持たせることは重要であると考え。今後も繰り返し正しい表現に触れさせ使える言語活動の場を意図的に設定し、児童が正しく使いながら習得することができるような指導を継続していきたい。

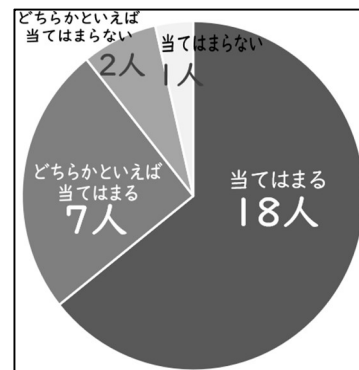


図 23 目標表現を使えたと思う児童数

表 6 「技能」評価 (L9)

A	13 人	93%
B	12 人	(25 人)
C	2 人	7%
未・・・1 人 (欠席)		

また、振り返りシートに、その日の学習を振り返って「分かったこと、できたこと・理由」、「できなかったこと、困ったこと」、「次の外国語の時間に頑張りたいこと、できるようになりたいこと」を記述させた。自らの学習を振り返り、できた事・できなかった事・できるようになりたい事については、検証授業 I においても全員が記述していた。そこで、検証授業 II では、「できるようになりたいこと → そのために取り組むこと・がんばること」を追加し、メタ認知だけでなく、次の学習につなげるためにどう取り組むかも記述できるように振り返りシートの工夫をした。児童の振り返りシートへの記述から、検証授業 I に比べると、自らの学習を調

整することを意識させることができた
と考える(図24)。実際の授業内では、
「繰り返すが難しい。IをYouに変える
ためには、相手の話をしっかり聞か
ないといけない。コツは相手の話を聞
くこと。」と発言があった。「繰り返す」
ことができるようになるために、どう
取り組むかを考えた姿であると捉える
ことができる。

- ・時間をあまらせないようしたい。質問したり、くりかえしたりする。
- ・話すときに、繰り返すことができなかつたので、ちゃんと話をきいて繰り返すことができるようにしたいです。
- ・話を続けることができなかつたので、次はもっと質問などをしたい。
- ・ゆっくり話すことができなかつた。早口にならないようにきをつける。
- ・一言感想をできるようにする。→ちゃんと話をきく。
- ・「ゆうかん」というたんごがむずかしかつたので、練習して言えるようにしたいです。

図24 児童の振り返りシートへの記述(原文のまま)

次に、「単元ゴールに向かって粘り強く
取り組んだか」に関するアンケートの
結果が図25である。両単元において、
肯定的な回答をした児童が95%以上
であった。単元ゴールや話す場面の
設定を工夫したことや、「相手意識」「目
的意識」を持たせることは、児童が主
体的に活動に取り組もうとする手立て
として有効であったと捉える。「どち
らかといえは当てはまらない」と回答
した児童1人は、授業内でも英語で言
いたい表現を確認する様子や、振り返
りシートに「質問することができなかつ
た事が一番の課題だと思います。質問
もたくさんできるように、がんばりた
いです。」と記述するなど、授業内の
様子からは、粘り強く意欲的に取り組
む姿が見られた。

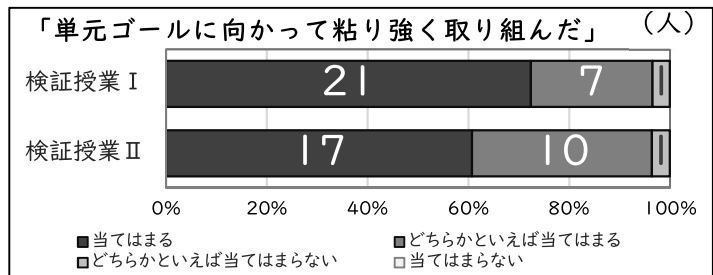


図25 「粘り強い取組」に関するアンケートの結果

さらに、「英語を使って自分の
思いや考えを進んで伝える
ことができる」のアンケート結
果が図26である。検証前と比
べると、検証授業IIの後には、
「当てはまる」と回答した児童
が5人増え、「どちらかといえ
ば当てはまる」も含めると25人
(89%)の児童が進んで伝える
ことができると回答した。否定的な回答は、9人(31%)から3人(11%)に減った。児童に、「外国語の授業でやってみたい活動はありますか?」と聞くと、「実際に外国の人と話をしたい。」「1日ずっと英語で過ごす。」「クラス全員で英語で話し合いがしたい。」などが多く上がった。英語で話すことに対し、検証前に比べると自信が付き、話す意欲も高まったと考える。

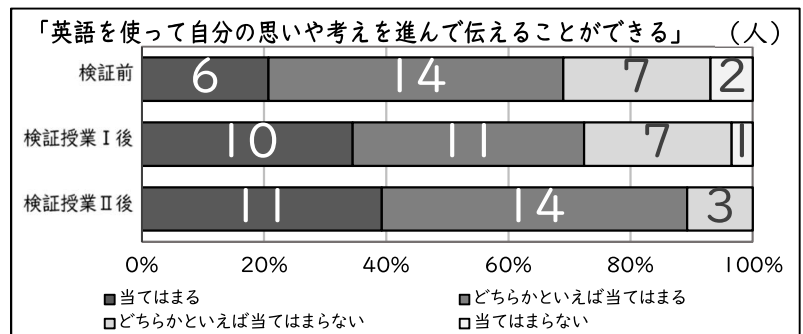


図26 「主体的に話すこと」に関するアンケートの結果

以上のことから、Small Talkを含む「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」の場において、児童に「相手意識」や「目的意識」を持たせ、自分が本当に伝えたいことを話せる場を設定することや、英語で話す必然性を持たせるような単元ゴールを設定することで、児童が主体的に英語でコミュニケーションを図ることにつながったと考えることができる。

VIII 研究の成果、課題・対応策

1 成果

- (1) Small Talkにおいて、単元の目標表現や関連する既習表現を組み合わせ、児童の興味・関心に合うような内容で計画的に活動を行うことで、既習表現の定着を図ることができた。
- (2) 「対話ポイント」として対話の継続法を知り、それらの表現に慣れ親しませたことで、英語を使って伝え合うことに自信を持たせることにつながった。

(3) 「話すこと」において、児童が「相手意識」「目的意識」を持ち、英語で話す必然性を持たせるような単元ゴールを設定したことで、英語でコミュニケーションを図ろうとする「主体的な学び」を引き出すことができた。

2 課題・対応策

- (1) 学習している単元における目標表現の習得に向けて、言語面に焦点を当てる具体的な手立てが不十分であった。英語の音声や表現、文構造などに対する児童の気づきを、他児童にもつなげ全体共有をしながら、繰り返し正しく表現できるよう言語活動の充実を図る。
- (2) 児童は、自らの学習を振り返り、「できた・できなかった・できるようになりたい」を認知しているが、できるようになりたい事に対して「次はどう取り組むか」「次にどうつなげるか」まで児童の思考を深める手立てが不十分であった。「できるようにするには、どうするか」と考えるような声かけや、自己調整できている児童の記述等を紹介するなど、児童の振り返りを次の学習へつなげられるよう工夫する。

〈参考文献〉

- 酒井英樹 2021 「目的・場面・状況をどのように設定するか」 瀧本多加志編 『三省堂小学校英語マガジン A C E 第4号』 三省堂
- 田村学 2021 『学習評価』 東洋館出版社
- 樋口忠彦 2021 『「深い学び」を促す小学校英語授業の進め方』 教育出版
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2020 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 外国語・外国語活動】』 東洋館出版社
- 瀧沢広人 2019 『英語教師のための Teacher's Talk & Small Talk』 明治図書
- 直山木綿子 2019 『なぜ、いま小学校で外国語を学ぶのか』 小学館
- 丸岡慎弥 2019 『話せない子どもどんどん発表する！対話力トレーニング』 学陽書房
- 山口美穂 2019 『Small Talk 月別メニュー88』 明治図書
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂
- 山田誠志 2018 『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業』 日本標準
- 文部科学省 2017 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』

〈参考WEBサイト〉

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領などの改善及び必要な方策等について（答申）」
- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧 2021 年 12 月）